

# 川系男子の『川と人』めぐり No. 12～花室川～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

## 『川と人』めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

### 1. 新年度のご挨拶

昨年度、筑波大学大学院生命環境科学研究科の博士前期課程を修了し、今年度より、同大学院のシステム情報工学研究科博士後期課程に進学することになりました。大学3度目の入学式。私にとっては大きなチャレンジです。引き続きどうぞよろしくお願い致します。

### 2. 春の暴風とともに

2013年3月18日。春の少し強い風が吹く中、ガサガサ隊は決行された。ガサガサとは、用水路や川などに入り、サデ網やタモ網という網で魚をガサガサととるしぐさのことである。これが非常に楽しい。

前々から友人のIとS先輩と卒業記念にガサガサに行こうと約束していた。大学の実験室から胴長や網、バケツなどを積み込み、現地に向かった。友人Iは4月から大阪勤務、S先輩は鹿児島島の離島の観光開発と散り散り。僕が学部生の頃からの付き合いだけに少しさみしい。川での思い出は色々ある。川の思い出をつかってお別れが川系男子の友情にはふさわしいと思う。

最初に向かったのは霞ヶ浦の北側の湖岸付近の用水路。周囲にはレンコン畑が広がっている。さっそく胴長を履き、臨戦態勢。Tシャツは卒業記念品としていただいた『川の学校』河童Tシャツ。川系男子スタイルで臨んだ(図1)。冬場の用水路は流れがないため、レンコン畑の近くの水路だから分からないが、泥のたまり具合がすごく、足がずぶずぶと沈んでいく。うまく這い上がりながら、網を振る。周囲を足でガサガサしては網の中に追い込む。泥とともに重くなった網を陸上にあげると、黒い泥の中からきらりと銀色に輝くものが。泥を手でかき分けていくと魚が大漁。図鑑で同定したわけではないが、目視でモツゴ、ヤリタナゴ、スジエビなどが取れた。特にタナゴはここでよく採れた。

こうやって泥水の中で魚を採っていると高校時代を思い出す。よくタナゴを採りに遠賀川流域の水路や池に出かけていたあの頃が懐かしい。

タナゴが多くお目にかかれたので、少し場所移動。湖岸に沿って移動していくと湖岸に湖側からの荒波が吹き荒れる。春の嵐と言ったところだろうか。2kmほど移動した水路で再びチャレンジ。同じような水路なのだが、今度は少し魚種も違う。ギンブナが多く、ヌマチチブも採れた。同じような場所でも微妙な環境の差で優先魚種も変わってくるから面白い。



図1 霞ヶ浦周辺水路のガサガサの様子

### 3. 貧弱な川にも五分の魂(花室川)

霞ヶ浦周辺でのガサガサを切り上げ、最後のポイントとして花室川へ向かう。

花室川は筑波大学付近の田園に源を発し、農業排水を集めて流れる河川である。流路延長約10.6km、流域面積38.8km<sup>2</sup>の小さな河川であり、住宅や田園の中を流れて霞ヶ浦に注ぐ(図2)。

今回、ガサガサのポイントに選んだのは花室川の河口から5km付近。住宅地の橋の付近から堤防下へ降りる。水位はひざ下で水路よりも動きやすい。さっそく網を入れると、ヌマエビ、モツゴ、ハス、ワタカ、ゼゼラ、クサガメなど水路より大型の生き物が多く網に入る(特定外来生物のブルーギルも採れたが、特定外来生物法により、採集場所からの移動はできないことになっているのでその場で殺処分した)。色んな種類の生物が採集できる川だが、この川見た目にはちょっと驚く。堤防は護岸ブロック、おまけに河床もブロックが敷き詰められている三面張りの無機質な川(図3)。おまけに、この川は独自水源がほとんどなく、農業用排水路の水を集めて流れていて水質的にも良いとは言えない。河川環境でいったら少し貧相な部類に入る川だろう。しかし見た目がこんな貧相で川で、弱々しい川でも多くの生き物を育てている。やはり川の力はすごい。小さなどぶ川もちゃんと生きていて、それぞれの川のかたちがあり、一つ一つに悠久な川の物語がある。そう思うとこのどぶ川が急に愛おしくすら感じられる。

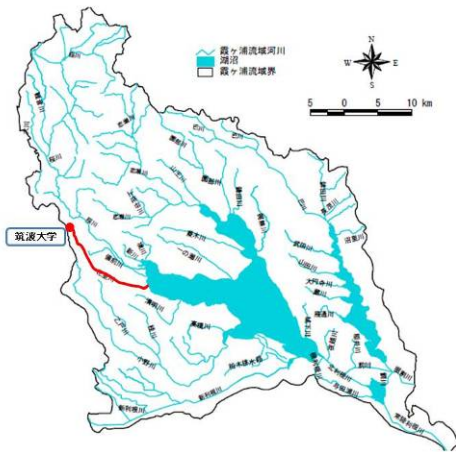


図2 霞ヶ浦流域図  
(国総研研究資料より引用・加筆)



図3 護岸ブロック三面張りの花室川

#### 4. 花室川の源流はどこだ？

先ほども述べたように花室川にははっきりした源流がない。地図で上流へ、上流へと辿ると、途中から突然川が消える。普通、川と言えば、山の奥地や台地の切れ目などが湧きだした湧水が少しずつ川の流れをつくっていくため標高差がある。しかし、花室川の水源と言われるあたりの土地利用は水田で、ほとんど土地の起伏が無い。大学の少し北西のあたりが源流と言われているが、ある時まであった川が突然見えなくなる。どこかで湧水が湧いている可能性はあるが、ほとんどは農業用の排水路の水を集めて流量を増している。地図上ではこれ以上確認できないので実際に見に行く必要がありそうだ。川を視るのはこういうところが楽しい。地図上ではわからないことをあれやこれやと推測して、実際に現地に行ってみようか確かめる。私の仮説だが、花室川の源流と呼ばれる筑波大学の北部キャンパスのあたりは天王台と呼ばれている。1970年代に学術研究都市を設置する際に都市開発でつけた名前ではあるが、『台』がつくということは、ここはもともと台地だったのではないだろうか？すなわち今は分断されてしまっているが、天王台の台地から染み出る湧水が水源となり、花室川を形成している。今も台地の湧水が道路の下を伏流して、湧き出しているのではないだろうか。

#### 5. 意外と知らない身近な川

先日、同じ研究科の友人に「花室川ってあれってどこから流れてくるの？ジョギングしていたら気になって…」とタイムリーな質問された。僕も同じようにこの間まではこの川を川と認識することはなく、ただの水路のように思っていた。しかし、これも「花室川」という名のある立派な川。川には自転車が放置されているような川。私達は川といえば 美しい水際線、水辺へのアクセスしやすい親水性、風景としての美しさなど固定の川のイメージを持っている。(個人差はあるが)逆に言えば日本の川は美しい川も多いのかもしれない。しかし、こうしたイメージと少し離れた川でも実際川の中に入ってみると、様々な魅力がある。むしろ近くを流れていた普通の河川にこんなに魅力が詰まっていたことに驚きすら感じる。遠くの川にはわざわざ出かけるのに、近くの川は通り過ぎるばかりで川の中のことをほとんど知らない。まさに灯台下暗し。何気ない川だからこそ、自身で川の魅力を発見した時の感動は大きい。皆さんも暮らしと身近な川出掛けませんか？



図4 花室川地図 (国土地理院地形図に加筆)

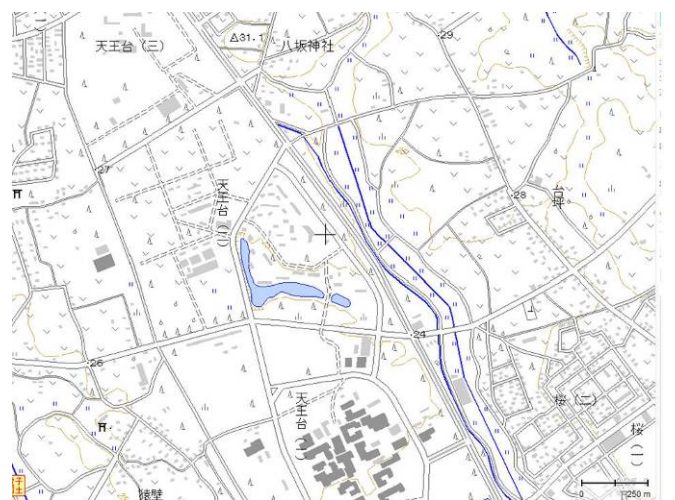


図5 花室川拡大図 (国土地理院地形図)



### 採集した生き物



クサガメ



ブルーギル (特定外来生物)



ハス?



モツゴ (WEB さかな図鑑)



ギンブナ



スジエビ (WEB 魚図鑑)

#### 【筆者について】

坂本 貴啓 (さかもと たかあき)

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢めている。筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには川の源流を探ること。